

日本語概要

Modern take on traditional medicine

伝統医学に現代的アプローチをプラスする

“The practice of medicine is an art, based on science.” 医療は科学に基づくアートである。現代医学の父と呼ばれるウィリアム・オスラーが発した言葉である。この普遍的な哲学は、西洋医学だけにとどまらず、これまでのありとあらゆる臨床家の進化に、深く根差しているメッセージだろう。実際、古い時代から利用されてきた日本の鍼、そして灸は1500年以上の歴史を携えて、現在は「Hari-kyu」と合わせて呼ばれている。様々な理論のバランス、さらには様々な方法から患者に最適なものを選び抜き、症状を見極めつつ直感も大事にしながら現在の有資格者は、このアートと向き合っていると言えよう。

今年11月、日本は23年ぶりとなるWFASを開催する。これは世界の臨床や研究にまつわるありとあらゆる問題や標準化、そして革新技術の発展、持続可能な治療方法としての強みのアピールなど多岐に渡る予定だ。

「真の医療とは、個々人の全体的な健康状態を見るべきだ。だからこそ、科学的なアプローチだけでは足りないのだ」と今年のWFASの会頭をつとめる後藤修司は語る。この人物は鍼灸界で多大なる成果を成し遂げ、自身の学校の会長を務めたり、全日本鍼灸学会のトップをつとめている。

Hari-kyuは、その全人的なアプローチを用いて、病気・身体・心・スピリットとすべてを治療する。患者の身体的な症状をすべて注視し、治療能力を引き出しホメオスタシスを正常な状態へと整えるのだ。

Hari-kyuの哲学には、適切な刺激量を一定期間あたえることで、患者自身の自然なバランスを取り戻せるというものがある。

古代中国から1500年ほど前に伝わってから、伝統的な日本の医学は独自の発展を各時代で成し遂げてきた。日本でおこなう治療のユニークな点は、診断をおこなうために治療前から治療中、治療後までの間、手から得られる情報を非常に大切にするという点が挙げられる。肌の表面に直接触れることで、結合組織・筋肉・内臓など様々な情報をその触感覚から得、そこから診断を下す。さらに臨床家はその手から伝わる感覚を、治療後にどう変化したかしっかりと捉えることで、個々の患者への治療効果を最大限に引き出しているのだ。日本鍼灸のさらなる特徴は、刺激がとても軽微であり、疼痛感覚を減らすために鍼管を用いることだろう。触診後に虚実をとらえてから、様々な技術を用いて体の表面から必要な刺激を加えていく。この微妙で、繊細な刺鍼方法は西洋諸国でも歓迎されており、特に長くて太い鍼に難色を示す患者にはうってつけなのだ。Hari-kyuは実に様々な疾患に対応する。運動器疾患（腰痛、肩痛）が最も主訴としては多いそうだが、実際には頭痛、不妊など多岐に渡り、スポーツ医学、精神疾患、そして癌などの終末期医療にも利用されている。

プロ・スポーツの世界でも、このような全人的なアプローチはアスリート達の体調管理には欠かせないようだ。メジャーリーグのサンフランシスコ・ジャイアンツでチームのトレーナーであり鍼師の小川氏は、2008

年から関わっているが前人未踏であったワールド・シリーズ 3 回優勝を、小川氏が加入してから成し遂げたのである。日本でまず教育を受けたこともあり、手から得られるそのスポーツ選手のバランスを重視していると語る。指先から得られる情報が診断に役立つとインタビューでも語っている。利点はそれだけでなく、**Hari-kyu** は薬物投与ではなく物理療法のため、ドーピング検査でも安心なのだ。

伝統医療に懐疑的な立場の人でも、最近ではまず臨床での効果を集約させてそこから科学的なメカニズムを解明し、その効果を裏付けていくという方法が取られているので、十分な証拠が解明されつつある。世界中で、鍼灸のみならず伝統医療の科学的根拠が研究されている。RCT やメタアナリシスを通して、**Hari-kyu** の効果が発表されており、そのテーマも慢性痛、化学療法による嘔吐・めまい、偏頭痛、筋繊維硬化症、リウマチ、陣痛緩和、逆子治療など実に幅広い。

2011 年の東日本大震災では、処方薬・医師・水・電力などすべてが不足した。現地では、避難所となった体育館の床や、車中で寝る住民が不眠症や PTSD に悩み、東北全域で **Hari-kyu** の治療に被災者は助けられた。

日本で発展した直接灸を用いて、アフリカ諸国でも結核治療のパイロット・スタディが敢行されている。原氏が確立した治療法は、日本国内で 1930 年代に結核に苦しむ多くの患者を救った。苦痛が緩和され、患者自身の免疫力がアップしたという報告があり、特に重要なのはアフリカ諸国で、地元の住民たちが自ら施灸している点だ。持続可能で金銭的にも安価な治療モデルとして受け入れられている。

これまでの歴史を見れば明らかだろう。**Hari-kyu** の治癒力は、この 1500 年間まったく衰えておらず、さらなる持続可能なヘルスケアとして高い潜在能力を見せつけているのではないか。この常なる進化をさらに加速させ、日本の現代の臨床家は時代とともに医療の進化に合わせながら、社会の変化も考慮しつつ、前向きな方法で伝統的な理論を重んじながら **Hari-kyu** の価値を高めようと切磋琢磨している。

BY SIMONE CHEN